

## 「現場」での経験から「分断」を超える

塩原良和 しおばら よしかず

法学部政治学科 教授

ゼミには法学部政治学科の3・4年生を中心に、約30名が所属。社会変動論・国際社会学の観点から、サービ斯拉ーニングを取り入れた教育実践に取り組んでいます。

現代を表すキーワードとして、「社会の分断」が語られるようになりました。私のゼミでは、現代社会はどのように分断しているのか、その原因は何かを社会学的に学んでいます。とりわけ私が専門とする、社会変動論／国際社会学と呼ばれるマクロ／グローバルで理論的な視座を重視しています。

社会の分断は、他者やそれを取り巻く社会への想像力の欠如を伴います。

学問的な知識を得ることは重要ですが、いくら知識を得ても他者への想像力なしには分断の現実を理解することはできません。それを乗り越える構想も生まれません。それゆえこのゼミでは座学に加えて、すべての学生に2年間、大学外のNPOと連携した若者向けの活動に継続的に参加してもらい、支援者としての経験を積んでもらいます。

具体的には、貧困家庭の子どもへの学習支援、外国にルーツをもつ子ども・若者への学習支援や地域での居場所づくり、そして定時制公立高校での「校内カフェ」の運営に、学生は主体的に

参画しています。そうした「現場」での当事者との関わりから、学生たちは机上の学問的知識をとらえなおし、社会のあり方をより深く理解していきます。このサービ斯拉ーニングの実践を通じて、格差や貧困の克服、多文化共生の推進、若者の孤立の解消などをリアルに構想できる力を学生に身に付けてもらうことを目指しています。

格好良いことを書きましたが、学生は授業に加えて学外活動に取り組みねばならず、大きな負担を強いられます。私も学外団体との細かい調整や計画変更が頻繁にあり、時間を取られます。この教育実践を始めて10年以上経ちますが、いまだに試行錯誤の連続です。それでも貴重な経験を経て確実に成長していく学生の姿と、彼・彼女らがしばしば生み出してくれる、私の想像を超える学問的示唆、そして現場への波及効果を目の当たりにすることは、教員としても研究者としても貴重な「半学半教」の経験です。

### 「対話」の難しさに挑み続ける

おくしま 奥島ひかる君 法学部政治学科4年（執筆時）

ある日のゼミの仲間たちとのプレゼン準備中、手元のノートを見て思わず笑ってしまいました。文の終わりが全て「？」なのです。このゼミではよくある現象です。ゼミのテーマの一つである、他者に「想像力」を働かせ「対話」することは、響きは良くてもなかなか難しく、固定観念や無知に邪魔されてゼミ生の頭の中はいつも「??？」です。しかしフィールドワーク先での体験や、ゼミ生や教授とのディスカッションの中で、自分の殻が破られる、何かをつかみかける瞬間があります。喜びもつかの間、また新たな「？」にぶつかりますが、懲りずに向き合える仲間・環境を得られたことは、大学生活の中で大きな財産です。



## 「看護とは何か?」「看護師とは誰か?」

本プロジェクト（ゼミ）では、看護に関する課題について文献を読み、自分の言葉で語り、仲間  
の意見を聴き、対話することを通して、看護を哲学します。

みやわきほこ  
**宮脇美保子**

看護医療学部 教授

私は、看護の基盤となる「基礎看護学」を専門にしております。学生は、基礎看護学の中で、看護の本質を理解する上で重要な「人間」「健康」「環境」「看護」「生活者」「ケア」といった概念とともに、生活援助や医療支援に必要な看護技術について学びます。

学生は、臨床実践の経験がない1、2年生の頃は、学んだことを何となく理解しているのですが、3、4年生になると臨床実習の中で、「あの時学んだことは、こういうことだったのか」と身をもって経験することにより理解は深まり、大きく成長します。

そうした中で、もう一度、4年間で振り返り、看護の本質について考えた学生が「宮脇プロジェクト」を選択してくれれます。本プロジェクトでは話し合いを重視しています。経験を踏まえた自身の考えを言語化し、他者との対話を通して理解を深めていく過程は、私にとっても刺激的であり、共に学んでいる感覚がもてる充実した時間です。プロジェクトの課題は、毎年、学生

の希望で決定しています。過去の課題には、「ケアリング」「ユマニチュード」（ケア技法のひとつ）「倫理実践」など、いろいろありますが、人気のある課題は「ユーモア」です。2019年度も8名の学生が「ユーモア」を課題として、研究に取り組みました。多忙を極め、緊張状態が続く医療現場だからこそ、ユーモアが効果的なコミュニケーションツールになると考え、患者・家族だけでなく、看護師や医師も笑顔でいられるような職場とはどうあるべきかを考えて、研究を進めています。人は、辛く苦しい状況にあるにもかかわらず、笑うことで気持ちが楽になり、楽しいと思えるようになります。卒業を前にした学生たちは、多忙な現場で理想と現実のギャップに苦悩し、自分を見失いそうになったとき、ユーモアが自分を助けてくれると考えているようです。

どうか、学生の未来に幸あれ。

### ユーモアのある空間

なかやまわかな

中山和佳奈君 看護医療学部4年（執筆時）

私たち宮脇プロジェクトでは基礎看護学分野において、「人間とは何か」「看護とは何か」などの本質的な問いについて意見交換をしています。自分の考えを言語化し意見を交わすことで、新たな価値観や視野を獲得できる充実した時間となっています。

2019年度は特にユーモアに焦点を当てています。私たちはユーモアを日常生活に限らず、医療の現場においても活用できると考え、「臨床現場におけるユーモアの活用」「組織におけるユーモアの活用」の各分野で研究を行っています。

ユーモアの研究をしている私たちは、プロジェクト内でも笑いが絶えず、話しやすい空気感で楽しく意見交換をしています。

